茨城国体参加報告書

報告者　川井　剛

審判会議

１０月３日（木）　１６：００～
日立シビックセンター２階　多用途ホール

宇田川　貴生　様　より

①バスケ界にTOTOが関わる

→今までにない状況が生まれる※賭け事の対象になる可能性
→八百長　例：ゲームの最初にファウルをするのは誰か？なども
refereeがこのようなことに巻き込まれる可能性もある。また、バスケ界全体として見られてしまうものなので、リスクマネジメントを。

②インティグリティーに関して（TFの報告　集計結果）U12、１５、１８準々決勝以降

→１００ゲーム中１件の割り合い
→IH　・・・２０ゲーム中１件
→全中・・・３３ゲーム中１件　　全国大会において割り合いが高い
リスクマネジメントが必要。映像が残る時代なので、「なぜあの振る舞いに対して審判はTFをコールしないんだ？」という目線の方が大きくなる。観客から見てもフェアに。

③FIBAの笛/日本の笛

W杯を終えて、上記のような言葉がネットで見られるようになった。
フィジカルコンタクトに対して　吹く/吹かない　ということか？
→refereeの笛が日本代表のフィジカルに関係するという見方についてはやめてほしいと伝えている
→技術委員会とも話し合いを持つ。FIBAの笛、日本の笛、フィジカルとは？→明確にする！
その中で・・・
No foul ⇆ marginal ⇆ foul という見極めについては一旦おいておいて・・・
No foul（legal） ⇆ foul（illegal）を、もっと議論（見直し）を。No foulを簡単に鳴らしていないか？legal or illegal の見極めを。

担当ゲーム

池の川さくらアリーナ
１０月４日（土）　Cコート　３試合目　　茨城　vs　沖縄　（成年男子１回戦）
CC 谷古宇（東京）　U1 川井（鹿児島）　U2 武井　（栃木）

PGC

・シーズンテーマの確認
（active reed、game flow、delivery skill、checkin -out、primary）
・guidelineの確認
・crew workについて
（OBB help、UF、clock management）
多くの映像を用いて、３人で気をつけることについて確認した

GAME

１Q
　比較的に落ち着いた様相でゲームがスタートした。沖縄の勢いがあり、点差を広げていく展開に。両チーム合わせてファウルが５つと、natural intervalの状態だった。個人的には、ショットファウルの見極めにおいて、ファウルになりそうと決めつけたために確認が足りていない状態で鳴らしたケースがあった。その時の原因としては、自分だけが１Qのコールがないことや、動きながらの判定だったことが挙げられる。
２Q
　１Q同様に、沖縄のペースでゲームが進んだ。オンボールのボディーコンタクトに関しては、illegal or marginalの見極めがクルーとして良くできていた印象だが、オフボールでの手が絡むケースや、選手が倒れるケースに関して、判定ができなかったことがいくつかあり、後半に影響のある吹きこぼしとなってしまった。ペイント内で人がごちゃごちゃする中でのコンタクトについて、自分がどのディフェンスをつかまえなければいけないのか、はっきりさせておくべきだった。
３Q
　前半とは変わって、ゲームが激しくなった。特に茨城が勢いを増し、前半以上に選手のインテンシティーもあがっていった。その中で、激しさにとらわれて、見極めが足りない中でのコールがいくつかあった。CCの谷古宇さんから、こっちが慌てることはないから、しっかりと見極めていこう！と声かけがあり、激しいコンタクトの中でも何がillegalで何がlegalなのかを丁寧に見極めることができた。shotclock violationのケースがあり、マジックタイムを把握していたから自信を持って吹くことができた場面があった。どんなゲームでもクロックを把握する意識が大切であると思った。
４Q
　ゲームは茨城が追いつき、シーソーゲームに。お互いにチームファウルが５つめになり、激しい展開に。タイムアウトのたびに、クルーで後の展開や起こりうることを確認しながら臨んだ。ラスト２３秒、茨城が１点ビハインド。タイムアウト明けに、茨城がバックコートからのスローインを選択。自分はTOサイドのCにいて、２３秒残っていること、沖縄がシュート決められた際にはタイムアウトがあることをインプット。時間を多く使い、茨城がドライブインからショットを決めて、沖縄がタイムアウトを請求。その際、タイムアウト請求に対してのみ意識がいってしまい、クロックを見るのを怠ってしまった。表示されたクロックは２．８秒。しかし、沖縄ベンチからは時間が０．２秒進んだと主張してきた。クルーで集まって確認をしたが、正しい情報を持っているクルーがおらず、表示通りに２．８秒で再開に。EOGの場面。T：谷古宇、C：川井、L：武井。

フロントコートからのスローインなのでクロックプライマリーはTだったが、EOGの合図、確認が、直前の沖縄からの主張があったため、クルーの中でん抜けていた。ブザービーターで沖縄がゴールを決めたか、ブザーが先だったか、という状況になり、Tが少し遅れてノーバスケットのジャスチャー。茨城が１点差で勝った。IRSがあれば確認をしたい場面だが、Cサイドから見た印象では、ボールが手の中に入っている間にブザーが鳴ったと判断した。しかし、これがスローイン前の沖縄の主張が正しく、０．２秒進んでいたのだとしたら、レフリーの確認ミスで勝敗が変わってしまったことになる。

MTG 主任：片寄（宮城）

　ファウルログをつけてくださっていて、ログを見ながら確認。

　１Qは沖縄のファウルがおおくつき、２Qは茨城のファウルが連続で多くついた時間帯があった。この時に、どんな様子だったのかをもう一度振り返ってほしい。

　３Qと４Qに両チームともにファウルが増えたが、前半のうちに記録できるものがまだあったのではないか

　クロックには不安が残った。EOQ・EOGの場面、クロックが止まらなかった場面。

　２Q～３Qにかけて、オフボールでのコンタクトや腕の使い方にもっと頑張ってほしい。何があってそうなったのか、把握ができているか？illegalではなかったか？marginalなのか？そう判定した理由が説明できないものがあったのではないか

　EOGの場面では、確かにクロックが進んだ印象をもったとのこと。おそらく、沖縄ベンチの主張は正しかったのではないかと考えられる。RIQを駆使して、クロックを絶対に落とさないメンタルが必要な場面。

池の川さくらアリーナ
１０月５日（日）　Cコート　１試合目　　東京　vs　大阪　（少年男子２回戦）
CC 片寄（宮城）　U1 佐田（山梨）　U2 川井　（鹿児島）

<u>PGC</u>

・クリーンザゲーム
（machanics、primary、clock control、guideline、crewwork）
・審判会議で話題になった、illegal or marginalの見極めについて映像で確認
・doublecallになった際に気をつけることを映像で確認
・TOとのコミュニケーション、管理について確認

<u>GAME</u>

１Q
5:49 L 佐田　　9:58 T 川井

same case same call ということで、頭部へのHITを意識をしてコールすることができた。

残り０．7秒　FT シューターがリングにボールが触れる前に飛び出すヴァイオレーション

０．2秒に進んでしまったので、正しい時間に訂正をクルーで行うことができた。

２Q
8:05 L 片寄　T 川井
　コーナーでの３Pショットについて、今シーズンからLがprimaryということであったが、スキップパスが飛んだ際にはLが間に合わない可能性もあるからその時はTが見るというカンファレンスで臨んだ。実際にその場面でショットファウルが起こった。

　Lが素早く目線をリバウンドに移し、Tがそのまま着地まで見続けることができ、判定に繋がった。今後のカンファレンスでも、ケースとして取り上げたい。

４Q

4:18 L 川井　T 佐田
　リバウンドに対する後ろからの悪い接触に関して、Lの川井の位置が悪く、Tから鳴らしていただいた。映像で確認したところ、結構離れた位置から、レイトコールで鳴らしていただいていた。Lとして開いて捉えないといけないプレイだった。

残り7．1秒　C 川井
　１点リードしている東京が時間を使ってショットで終わるが外れてしまい、ルーズボールを大阪がコントロールしてブレイクに繋げようとした場面。偶然であったようにも見えるが、東京の選手の足にきれいにボールが当たり、大阪の選手がコントロールを失ったことでキックボールを判定。決断を下すことができた。

MTG 主任：増渕（栃木）
　スムーズな進行だったので特にないが、４Qにコール出来なかったリバウンドのケースや、４Qに鳴らしたものが、 marginalではなかったか？と、４Qに課題が見られたということであった。１ゲームを通して良い位置、良いアングルでプレイを捉えることができるようにしたいと感じた。最後のキックボールについては、コールで全く問題ないとのことで、それまでにきちんとクルーでコールを積み重ねてきたからこそであるということであった。

ゲーム後、増渕さんと一緒に試合観戦をさせていただいた。その中で、『マージナル』という言葉についてお話をしてくださった。まず、コンタクトには『legal』か『illegal』があるのだということ。そこを見極めていないまま、『マージナル』の議論をすると変な方向にすすんでしまうということであった。『illegal』なコンタクトの中に、RSBQを侵害しないコンタクトが『マージナル』と判定されるということで、わからないけどなんとなくノーコールという判定が増えるのではないかと危惧されていた。そして、『illegal』を見極める入り口は、『referee defence』であるということ。そこに、『legal guarding position』『cylinder』という概念の理解が必要であるということをお話ししてくださった。審判会議にて宇田川委員長がお話しされていたこととも繋がることで、県内にも伝えていきたい。コンタクトの度合いや激しさ、offenseが崩れてしまった場面だけで判定されることがないように、見極めをしていきたい。

全体を通して

鹿児島IHを終え、個人的な課題意識（decisive、clock control、トレーニング等）を持ち、その中で、トップリーグを担当することやS級最終審査を経て、この日を迎えた。IH後に自身の課題として取り組んできたことについて、十分とは言えないが発揮できた部分が多々あった。今後も自分を振り返り、課題を見つめ、一つずつステップアップしていきたい。

いよいよ１年後に鹿児島国体が開催するということで、今年度の視察を通して感じたことを何点かあげたいと思う。

１点目は、今年度から全種別でオープン参加がなくなたことによるゲームレベルの高さである。少年カテゴリーがU１６になったとはいえ、各ブロックを勝ち抜いてきた２４チームはそれぞれに洗練されていて、また、長身の選手も大勢いて、県内では見られないレベルであった。成年カテゴリーでは、１６チームと厳選されたチーム同士の試合であること、大学生や実業団、B３の選手など、高校生以上のカテゴリーでプレーをしている選手同士の戦いであるということから、県内では経験できないレベルであった。１年後までに、どのようにして高いレベルでの研修を県内で行うか、考えなければならないと感じた。個々が高いレベルを求めて行動することも必要であると感じた。

２点目は、全試合３POでの実施が実現したことで、県内レフェリーの３PO理解をさらに高めなければならないことである。様々なところで今シーズンのテーマを見聞きするようになった今、新しい情報はさらに増えてくると考えられる。このような情報を県内レフェリーと共有して、３POの理解をさらに高め、実戦につなげていかなければならないと感じた。

３点目は、IHという経験の大きさである。運営面での視察の際に、鹿児島IHでの経験があったので、「鹿児島ではこのようにできるかな？」「IHのときにはこうだったから、次はこうしてみよう」と、具体的なイメージをもって考えることができた。IHで得ることのできた経験と反省を生かし、茨城での学びを県内で共有し、進めていきたい。